

醫者なら来て貰ふ。代診だと呼んで来る。

N・N・Vは決して誰の意見にも賛成したことがない。——「左様、この天井が白といふのはまあいいとしてもですな、一たい白といふ色は、現在知られてゐるところではスベクトルの七つの色から成るものです。そこでこの天井の場合でも、七つの色のうちの一つが明るすぎるか暗すぎるかして、きつかり白になつてはゐないといふ事も大いにはあり得るわけです。私としては、この天井は白といふ前に、ちよつと考へて見たいですな。」

彼はまるで聖像みたいな身振りをする。

——君は戀をしてゐますね。

——ええ、まあ幾分。

何事がもちあがつても彼は言ふ、「こりやみんな坊主のせゐだ。」

フキムル
Fyzikou.

Nの夢。外國旅行から歸つて来る。ヴェルジボロヴォの税關で、抗辯これ努めたにも拘はらず、妻君に税をかけられる。

その自由主義者が、上着なしで食事をして、やがて寢室に引き取つたとき、私は彼の背中にズボン吊を認めた。そこで私には、この自由主義を説く俗物が、濟度すべからざる町人であることがはつきり分つた。

不信心者で宗教侮蔑者を以て任じてゐるZが、こつそりとお寺の本堂で聖像を拜んでゐるところを誰かに見つかつた。あとでみんなからさんざん冷やかされた。

ある劇團の座長に四本煙突の巡洋艦といふ綽名がついてゐる。もう四度も煙突をくぐつた（身代限りをした）ので。

彼は馬鹿ではない。長いこと熱心に勉強をしたし、大學にもはいつてゐた。だが書くものを見るとひどい間違ひがある。

ナイデン伯爵夫人の養女は段々と儉約屋しまりになつて行つた。ひどく内気で、「いいえ」とか「はい」とかしか言へない。手はいつもぶるぶる顫へてゐる。或るとき、やもめ暮らしの縣會議長から縁談があつて、彼のところへ嫁に行つた。やつぱり「はい」と「いいえ」で、良人にびくびくするばかりで、少しも愛情が湧かなかつた。或るとき良人がとても大きな咳をしたので、彼女は動顫して、死んでしまつた。

彼女が戀人に甘えて、「ねえ、薦さん！」

ペレペニェフ君。

戯曲。——あなた何か滑稽なことを仰しやいな。だつてもう二十年も一緒に暮らしてるのに、しよつちゆう眞面目なお話ばかりなんでも。あたし眞面目なお話は厭々ですわ。

194

料理女が法螺を吹く、「ワクチ女學校へ行つたのよ（彼女は巻煙草をくわへてる）……地球がまんまるな譯だつて知つてるわよ。」

「河船艇舟索引揚會社」。この會社の代表者が、何かの記念祭には必らず現はれて、N氣取りのテーブル・スピーチをやる。そしてきつと食事をして行く。

超神祕主義。

僕が金持になつたら、ひとつ後宮をこしらへて、裸かのよく肥つた女どもを入れとくね。尻つべたを緑色の繪具でべたべた塗り立ててね。

195

内氣な青年がお客に来て、その晩は泊ることになつた。不意に八十ほどの聾の婆さんが

灌腸器を持つてはいつて来て、彼に灌腸をかけた。彼はそれがこの家のしきたりかと思つたので、大人しくしてゐた。翌る朝になつて、それは婆さんの間違ひだと分つた。

姓。^{ヴェルシュク}
*Verslak.**

*長い腰掛。

人間（百姓）は愚かであればあるほど、その言ふことが馬にわかる。

題材・斷想・覺書・斷片

……何といふ馬鹿げたことだらう。第一、何といふ偽善だらう。相手をやりこめて、不愉快な思ひをさせるのがその男の目的なら、何もグラノーフスキイ^{*}なんかを持ち出す必要はないではないか。

私は傷めつけられ散々に侮蔑された感情を抱いて、グリゴリー・イヴァーノヴィチの家を後にした。私は美辭麗句や、美辭麗句に隠れる連中に對する憤懣の念で、胸が一ぱいだつた。家に歸る途々かう考へた。——或る者は社會を罵り、或る者は俗衆を罵る。過去を讚美し現代を非難して、理想がないなどと喚き立てる。だがそんなことは、二三十年前にもやはり言はれたことではないか。それはもう役目を勤め上げて、廢れ物になりつつある紋切型ではないか。そして今日それを繰り返す者は、自分が若さを失つて、時代に遅れつつあることを白狀することになる。昨年の落葉の中に埋れる者は、昨年の落葉とともに朽ちるのだ。私は考へてゐるうちに、こんな氣もしはじめた——今や時勢におくれつつあ

る無教養なわれわれ、喋ることは俗つぽく、考へつくことは陳腐なわれわれは、すつかり
徴が生えてゐるのではあるまいか。われわれがインテリ仲間同志で古びた襤褸の山を搔き
まはしたり、昔ながらのロシヤ流儀で喱み合ひをやつたりしてゐるひまに、われわれの周
圍には何時の間にか、見も知らぬ別の生活が沸き立つてゐるのではあるまいか。「睡り娘」
みたいなわれわれに、やがて突如として大事件が襲ひかかるだらう。その時になつて諸君
は、商人のシードロフだのエレッツから出て来た郡立學校の教師だのといふ、われわれなど
より眼も見え知識もひろい人間が、われわれを舞臺のすつと後方へ追ひやるのを見るだら
う。何故なら彼等はわれわれ皆んなを束にしたより働きがあるからだ。また私は思つた—
—私達が互ひに喱み合ひながら、瞬時も喋々することをやめない言論の自由を、いま突然
與へられたとしたら、私達ははじめのうちはその使ひ途に困るに相違ない。折角のその自
由を、互ひのスパイ的行爲だの財慾だのを新聞紙上で暴露し合ふことに濫費するのが落ち
ではあるまいか。そしてわが國には人間らしい人間も、科學も、文學も、何から何まで一
切ありはしないといふ怖るべき事實を、社會に向つて立證するのが落ちではあるまいか。

ところでこんな事實を突きつけて社會を悩まがらせることは、われわれが現にやつてゐ
ることだし今後もやることだらうが、みすみす社會の勇氣を挫くことになるのだ。つまり
われわれは社會的意義も政治的意義も持つてをらぬといふことをはつきり裏書きすること
になるのだ。また私は考へた——新しい生活の曙光が射さぬうちに、われわれは縁起でも
ない老婆や老人になり果てて、その曙光から厭はしげに顔をそむけ、他に率先してその曙
光を譏誣中傷するやうになるであらう。……

*西歐派の有名な思想家。(一八一三—一五五)

——ママはしよつちゆう貧乏話ばかりするんです。それがとても變なんです。なぜ變か
つていふと、第一私達は貧乏で、乞食みたいに人様の情に縋つてゐるくせに、結構な食事
を頂いてますし、かうして大きな邸にゐますし、夏には田舎の持村へ避暑をしますし、一
向に貧乏人らしくないんですからね。きつとこれは貧乏ぢやなくて、何かしら別の、もつ

と悪いものなんでせうよ。第二に變なのは、もう十年このかたママは利拂ひのお金を工面するだけのことに精根涸らしてゐるんです。あれだけの精力があるんなら、それを何かほかのことに使つたら、今ぢやこんな家は二十軒ぐらゐる建つてゐはしないかと思ひますね。第三に變なのは、私達の家の一番つらい仕事はママが背負つてゐて、私の肩にかからないことです。これが私には一ばん不思議で、氣味のわるいことなんです。ママは、今しがたも自分で言つてましたが、ちやんと考へがあると言ふんで、そこらを頼み廻つて肩身の狭い思ひをしてゐます。借金は日ましに殖えるばかりですが、私は今の今までママの手助けは何一つしないのです。それに、この私に何が出来ませう。私はいくら考へて見ても、何にも分らないんです。私にはつきり分つてゐることは唯ひとつ、私達は坂道をぐんぐん降りて行くところだといふことだけです。先に何があるか——そんなこと誰が知るもんですか。今にも私達は貧乏のどん底に沈みさうだといふ話ですし、貧乏は恥辱だとかいふことも聞きますが、何しろまだ貧乏をしたことがないので、それも私には分らないんです。

あの婦人たちの頭の中味は、その顔色や服装と同様に灰いろで色つやがない。彼女達が科學だの文學だの傾向だのといった話をするのは、彼女達が學者や文學者の妻なり姉妹なりだからに過ぎない。彼女達がもし警察署長か齒科醫の妻なり姉妹だつたら、きつと火事や齒の話、同様の熱心さでするに相違ない。縁もゆかりもない科學の話を彼女達にさせて置いて、黙つて聽いてゐるのは、とりも直さずその無學に阿ることである。

もともとそんなことは、みんながさつで愚劣なことなんです。詩的な戀愛なんて言つたつて、山の上から無意識に落ちてきて人を歴し潰す雪崩みたいな、無意味なものに思へるんです。ところが音楽を聽いてゐると、さうした一切——つまり何處かの墓の下で睡つてゐる人もあれば、命びろひをして、白髮婆さんになつていま劇場のボックスに収まつてる女もある、といつたやうなことは、安らかで莊嚴なことのやうな氣がして、あの雪崩にしろもう無意味なものとは思へないんです、だつて大自然の中には、何一つ意味のないもの

はないんですからね。そして一切は赦されるんです。赦さなけりや可笑しいんです。

古くなつて、そろそろ用をなくなつたソファや腰掛や寝椅子を、鄭寧に勞はるオリガ・イヴァーノヴナの様子は、老いぼれた犬や馬に對するときと同じだつた。したがつて彼女の部屋は、さながら家具の養老院とでもいつた風な有様だつた。鏡のまはりにも、どの卓子の上にも、どの飾棚の上にも、半ば忘れられた人々の一向に見榮えのしない寫眞が立ててあつて、壁には今まで誰一人として眺めたことのない繪が掛けめぐらしてあつた。青い笠をしたランプがたつた一つともつてゐるだけなので、部屋の中はいつも暗かつた。

君が「前へ」と叫ぶ時には、前へとはどつちのことなのか、必らずその方角を示し給へ。もし方角を示さずに、この言葉で坊さんと革命家とを同時に焚きつけたら、彼等は全くち

がつた道を進むだらうことを認め給へ。

聖書のなかに、「師父たちよ、爾の子等が心を騒がすな」とあります。身持のわるい出来損ひの子等にさへさうせよといふのです。ところがうちの坊さんたちは僕をいじめるんです、ひどくいじめるんです。すると朋輩が、いいも悪いもなしにその眞似をします。若僧がまたその眞似をします。で私は、しよつちゆう結構な言葉で顔をぶたれてゐます。

叔母さんが心の苦しみを顔色に出さないのを見て、彼はまるで手品のやうだと思つた。

O・Iはしよつちゆうそこらを歩き廻つてゐる。ああした女といふものは、蜜蜂と同じ

に、授精力のある花粉を撒いて歩くものである。……

金持から嫁は貰ふな——亭主の方が追ひ出される。貧乏人から嫁は貰ふな——夜もろくろく眠られぬ。同じ貰ふなら、自由きままなコサツク氣質の女を貰へ。(ウクライナの諺)

アリヨシヤ よく世間の人がかう言ひますね、「婚禮までが花なのさ。婚禮は——さらば夢よ幻よ! さ」なんて。一たい何といふ情味のないがさつな言ひ草でせう!

梭魚かますの跳ねる水音が好きのうちは、その人は詩人だ。あれは強者が弱者を追ふ音に他ならぬと知るならば、その人は思想家だ。さて彼が、この追跡にはどんな意味があるか、驅

逐によつて得られる平衡がなぜ必要なのかを覺らないならば、彼は再び子供の頃のやうに馬鹿で痴鈍になる。そして物を知れば知るほど、考へれば考へるほど、益々馬鹿になる。

赤ん坊の死。やつとこれで一安心と思へば、忽ちまた運命の平手打ちさ!

神経質で心配性で子煩悩の牝狼が、冬籠りの番人小屋で小犬の「額白」を攫つた。羊の仔と思ひ違へをしたのである。彼女はかねがね、そこには牝羊がゐて、子どものあることを知つてゐた。「額白」を攫つて逃げ出すと、誰か不意に口笛を吹いた。彼女はあはてて小犬を口から取り落したが、小犬は後からついて來た。……無事に窩まで辿りついた。小犬は狼の仔たちと一緒に彼女の乳を吸ふやうになつた。次の冬が近づいても小犬は殆んど變らなかつた。ただ少し痩せて、脚が長くなつて、額の白い斑ぶらがちようど三角の形になつ

た。牝狼はからだが強かつた。

*これは短篇『額白』(一八九五年)の一部分をかい摘んで述べたもの。

さうした夜會といふと、きまつて名士たちが招かれて來た。そして退屈なものだつた。モスクヴァには才能のある人間は少ないし、どこの夜會でも出席者の顔觸れは同じだし、獨唱や朗讀も同じ顔觸れだつたから。

男と一緒にゐてこんなに樂々と寛ろいだ氣持になれたのは、彼女には初めてだつた。

まあお待ち。大きくなつたら、朗讀のやり方を教へてやるからな。

彼女はその展覽會に同じ繪が澤山並んでゐるやうな氣がした。

そこであなたの前を、洗濯女の一隊が分列行進をやつたわけです。

コースチャは、彼女たちが自分で自分の物を盗んだと言ひ張つた。

Lは陪審員になつた氣で考へて見て、次のことを覺つた。——押込行爲はあるが、竊盜行爲はなかつた。なぜなら下着類は洗濯女たちが自分で賣つて飲んでしまつたのだから。

三十一
二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九

もし竊盜行爲があつたとすれば、押込行爲はなかつたことになる。

有名な役者と食卓を共にしてゐるところを弟に見られて、フォードルは得意だつた。

丁が物を言つたり食べたりするときの髯の動き工合は、まるで口のなかに齒が一本もないやうだつた。

イヴァーシンはナーヂャ・ヴィニョシーフスカヤに戀してゐながら、この戀がぞら恐ろしかつた。門番が彼に、奥様はつい今しがたお出掛けになりましたが、お嬢様ならおいでですと告げると、彼は外套や上衣のポケットをどそどそやつて、名刺をさがし出すと、か

う言つた。「結構です……。」

ところが結構どころではなかつた。その朝、訪問のため家を出る時には、平ぜい苦に病んでゐる社交上の儀禮に迫られて出掛けるのだと思つてゐた。ところが今になつて見ると、自分がかうして出掛けて來たのは、ナーヂャに逢へるかも知れないといふ希望が彼の胸のどこかずつと底の方に、面纱ヴェールに蔽はれたやうに潜んでゐたからに他ならないことが、やつと合點が行つたのだ。……そこで彼は急に情ないやうな、悲しいやうな、些か空恐ろしいやうな氣がして來た……。

彼は、まるで自分の胸の中に雪が降つて、何もかも枯れ凋んでしまつたやうな氣がした。彼はナーヂャを慕ふ自分の氣持が恐ろしかつた。彼女の良人としては年をとり過ぎてゐたし、自分の風采は女の心をひかないと諦めてゐたし、またナーヂャのやうな若い娘が智力や氣質だけを見て男を愛しようなどは、考へられなかつたからである。とはいへ時には、

彼の胸にも何か希望に似たものが湧くこともあつた。ところが今、士官の拍車が鳴つて、やがてその音が消えた瞬間から、彼の臆病な戀も消えてしまつた。……これでおしまひだ、もう望みはないのだ。……「さう、これでもうおしまひだ」と彼は思つた、「俺は嬉しい、とても嬉しい……。」

彼は自分の妻としてはナーチャではなしに、なぜかしら盛りあがつた胸をヴェネチヤ・レースで蔽つた、肉づきのいゝ婦人を思ひ描くのが常だつた。

島の長官の事務所に勤めてゐる書記たちは、二日酔で頭痛がする。迎へ酒をやりたいたいけれど金が無い。さてどうしたものか。書記の中に、紙幣贋造の罪で送られて來た徒刑囚がゐて、これが一策を案ずる。彼は教會へ行く。教會の唱歌隊の中に、上官を毆打した罪で

流されて來た元士官がゐる。書記は息をはずませながら、この男にかう告げる。

「いらつしやい。あなたは赦免されたんですよ！　いま役所に電報が來たんです。」

元士官は眞蒼になつて、ぶるぶる顫へて、興奮のあまり足が進まない。

「ねえ、こんな吉報を持つて來たんだから酒代さかてをお出しなさいよ」と書記がいふ。

「さあ取つて呉れ！　ありつたけみんな取つて呉れ！」

そして五ルーブルほど呉れる。……やがて役所へやつて來る。士官は、喜びのあまり死んでは大變だと、心臓を抑へてゐる。

「電報はどこだ？」

「會計係がしまひましたよ。」（會計係のところへ行く。）

満座の大笑ひ、一杯いかがですと勧める。

「ええ、何てことだ！」

それから一週間ほど士官は病氣をする*。

*これは樺太視察中に得た材料。「サガレン島」には使つてない。

管理人の義弟のフェーチャが、森の向ふで野雁が餌を漁つてゐますよと、イヴァーノフに告げた。彼は鐵砲に霰弾ほらだまを込めた。不意に——狼が現はれた。彼はずどんとぶつ放した。狼の兩腿を碎いてしまった。狼は苦痛のあまり狂ひたけつて、彼の姿には氣がつかない。「可哀さうに、こりやあどうしたもんだらうな。」考へあぐんで、家に歸つて來て、ピョートルを呼んだ。……ピョートルは杖を持つて出て行つて、物凄いの形相をして、叩きはじめた。……叩いて叩いて叩きのめして、くたばらせてしまった。……汗びつしよりになつて、口も利かずに、向ふへ行つてしまった。

ヴェーラ 私、あんたを尊敬しちやゐませんわ。だつてこんな不釣合な結婚をなすつたんですもの。口先ばかりで、ちつとも偉くおなりにならないんですもの。……だから私だつ

て、あんたに祕密をもつやうになるのよ。

困つたことにわれわれは、極めて簡単な問題を大いに手際よく解かうと苦心する。だから問題をひどくこんがらかつたものにしてしまふのだ。簡単な解決を求めること。

ねえお前、俺は幸福で、何の不足もないさ。だがもしもう一ぺん生れて來て、「結婚したいか？」つて訊かれたら、「眞平です」つて答へるね。「金が欲しいか？」「眞平です」……

火曜日に席を譲らぬ月曜日はなし。

リョーノチカは小説のなかでは侯爵や伯爵が好きで、身分の低い人物は嫌ひだつた。戀愛のある章が好きだつたが、それも純潔な理想的な戀にかぎるので、みだらなのはいけなかつた。自然描寫は嫌ひだつた。描寫より會話の方が好きだつた。はじめの方を讀みながら、もどかしさうに終の方をちよいちよい覗いた。作者の名は知つても覺えてもゐなかつた。餘白に鉛筆で「すばらしい!」「まあ素敵!」「自業自得!」などと書き込んだ。リョーノチカは口をあかずに歌ふ。

Post column: —われわれボルダリョフ家の者は、代々剛健を以て聞えたものさ。……

彼は立去つてゆく息子の姿を、辻馬車の中から眺めながら考へた、「ひよつとしたらあの子は、俺とはちがつて、むさい辻馬車にがたびし揺られない組の人間かも知れない。氣

球に乗つて天空高く舞ひ上るといつた人間かも知れんて。……」

怖ろしいほどの美人だ。黒い眉。

息子は何も言はない。けれど妻君は彼が自分に敵意を抱いてゐるのを感じる。ありありと感ずる! 息子はすつかり立ち聴きしたのだ……。

婦人の中には何と大ぜい白痴がまじつてゐることだらう! 慣れつこになつてしまつて、一々眼にはつかないが。

彼等はよく芝居も観るし、厚い雑誌も読む。——でもやつぱり根性まがりで不身持だ。

ナターシャ あたしヒステリなんか起したことはなくつてよ。あたしそんなお上品な育ちぢやありませんよ*。

*以下暫くは『三人姉妹』の草案の断片である。

218

ナターシャ は姉妹に向つて口癖のやうに——まああなた、何て器量が落ちたの！ まああなた、何て老けてしまつたの！

生きて行くには何か引つかかりがなくてはなりませんわ。……田舎にゐますと肉體からだだけ

が飢いて、精神は眠つてゐるのですわ。

他人の罪を懺悔したつて聖者にやなれない。

クルイギン 私は陽氣な男ですよ。私がゐるとみんな私の氣分に感染してしまひますよ。

219

クルイギン 金持の家へ家庭教師に行つてるんだよ。

クルイギン は四幕目では口髭がない。

妻が夫に頼む、「肥らないで頂戴ね。」

ああ、だんだん若く美しくなつて行くやうな、そんな人生があつたらさぞいいでせうに
ねえ。

イリーナ お父さんもお母さんもなしで生きて行くのは辛いことだわ。夫のないのもねえ。さうよ、夫のないのもやつぱりさうなのよ。誰に打明けたらいいのでせう？ 誰に訴へたらいいのでせう？ 誰と一緒に喜んだらいいのでせう？ 人間といふものは誰かをしつかりと愛してゐなければならぬのだわ。

クルイギン（妻に） 私はお前を娶つてとても仕合はせをしたと思つてゐるよ。だから持参金のことなどは、話すのはもとより、口に出すさへ怪しからんことだ、相済まんことだと思つてゐるよ。お黙り、何も言ふぢやない……。

軍醫は二つ返事で決闘に立會ふ。

従卒のないのは辛いものさ。さくらベルを鳴らしたつて出て来やしなう。

第二、第三、第六の三箇中隊は四時に出發しました。われわれの隊はきつかり十二時に

出發します。

*『三人姉妹』草案の断片はここまでである。

……晝間は女學校の風紀の弛緩を談じ、晩にはひろく世相の墮落頹廢を一席辯じる。さて夜中になれば、とどのつまりピストル自殺でもしたくなるさ。

……わが國の都會生活には、ペシミズムもなければマルキシズムもない、何ひとつ思潮らしいものもない。あるものは沈滯と、愚鈍と、無能と……

……生活に飢ゑ渴いてゐた。ところで彼は、これはつまり一杯やりたいといふことだと

思つた。で彼は葡萄酒をやつた。

F町の町會で。セルゲイ・ニコラーエヴィチ（哀れつばい聲で）、「諸君、どこに財源を求むべきか。われわれの町は貧しいのであります。」

閑人だといふことはつまり、厭でも應でも他人ひとの話すことが耳にはいり、他人のすることが目に見えるといふことだ。仕事で忙しい人になると、殆んど見も聞きもしないものだ。

……スケート場で彼はLの後を追つて行つた。彼女に追ひつかうと思つたのである。すると彼には、つまりこれは生活に追ひつかうとしてゐるのだと、そんな氣がして來た。も

はやふたたび繰り返す由もなく、追ひつくすべもなく、また自分の影が捉へられないのと同様に捉へがたないあの生活に。

……わが身に引較べてみてはじめて彼は、その醫者を大目に見られるやうになつた。——自分がこの醫者の無學に苦しめられたのと同様に、自分の過ちも誰かに迷惑を掛けてゐるかも知れないと思つて。

……だが妙ぢやありませんか。これだけの町でありながら、一人の音樂家も、一人の雄辯家も、一人のずば抜けた人間もゐないなんて。

名譽治安判事、育兒院名譽幹事、——何にでも名譽をつけたがる。

妻のLは勉強すきだつた、いつも勉強してゐた。——彼はといふと、途中で發達の止つた男なので、彼女の氣持も分らず、若い者の氣持も分らなかつた。*Ut consecutum?*

……彼は栗色の髪をした男で、小さな頬髯を生やして、しやれた服を着てゐる。黒みがかつた眼をした、燃えるやうなブリュネットだ。南京蟲を驅除した話、地震の話、支那の話。縁談の相手の娘には八千ルーブルの持參金がついてゐて、叔母さんの言ふところによると非常な美人である。火災保険などの匿名組合の代理人。——「君はすごく綺麗だねえ、まつたくすごいほどだよ！ おまけに八千あるからなあ！」「貴方だつて綺麗よ。今日あたし、貴方を一目見たらからだぢゆう寒氣がして來たわ。」

彼曰く、「海水の蒸發から起つた地震。」

姓。——^{グズニヤ}Gusynja (鷺鳥)、^{カストリヤ}Kastrinja (手鐮)、^{ウストリヤ}Ustrisa (牡蠣)。

——もし私が外國へ行つたら、珍らしい苗字だと言つて賞牌を呉れるでせうよ。

あたし美人つていふ方ぢやありませんわ。どつちかつて言ふとまあ可愛らしい方よ。

日記

一八九六年—一九〇三年

一八九六年

隣りに住んでゐるV・N・Sからこんな話を聞いた。彼の伯父さんは有名な抒情詩人のフェートーシエンシのだが、モホヴァーヤ通りを通る時はきつと馬車の窓をおろして、大學に向つて痰を吐く癖があつたといふ。わざわざ痰を出しては、ペツと吐くのさうだ。馭者の方でも心得たもので、大學の前に通るかかると必らず馬車を停めたといふ。

229

一月はペテルブルグにゐて、スヴォーリンの家に泊つた。ポターペンコの家をよく訪ねた。コロレンコにも會つた。小劇場マイルイ・テアトルへもよく行つた。或る日アレクサンドル(長兄)と一緒に表の階段を降りて來ると、新時ノイヴ・アウレミヤ代社からちようどB・V・Gが出てきて、なじるやうな口調で私にかう言つた、「何だつてあなたは、親爺(スヴォーリンのこと)を焚きつ

けて、ブレイニンを憎むやうにさせるんですか？」しかし私は、スヴォーリンのゐる席で
新時^{ノイウオエウレミヤ}代の同人たちの悪口を言つた覚えはないのだ。尤も私が、彼等の大多数を心から
軽蔑してゐることは確かだけれど。

二月。モスクヴァを通過した序でにL・N・トルストイを訪ねた。彼は興奮してゐて、
デカダン派を小つびどくこき下し、一時間半もB・チチエーリンを相手に議論してゐた。
チチエーリンはその間ちゆう馬鹿なことばかり言つてゐたやうだ。タチャーナとマリヤの
二令嬢はカルタ占ひをしてゐた。二人は、何かしら望むものを決めて、私にカルタをめく
つて呉れと頼んだ。そこで二人に別々にスピードのポイントをめくつて見せたら、二人と
も悲觀してゐた。一組のカルタに偶然スピードのポイントが二枚はいつてゐたのだ。二人
とも非常に感じのいい娘さんで、そのお父さん思ひなことにはつくづく感心させられる。
伯爵夫人は一晩ちゆう畫家のゲエを貶しつづけだつた。やはり興奮してをられた。

五月五日。番僧のイヴァン・ニコラーエヴィチが、寫眞を見て描いた私の肖像畫を持つ
て来て呉れた。晩、V・N・Sが親友のNを連れて來た。これは外國課の課長さんで、
…雑誌の主筆……それから診療所の醫師。非常に愚かな男、しかも蛇蝎のやうな奴といふ
印象を受ける。彼は「およそ何が有害といつて、下劣な自由主義の新聞ほど害毒を流すも
のはありません」と言ふ。また彼の療治を受けに來る百姓たちは、無料で診察も投薬もし
て貰ふくせに、あべこべに心づけをねだるとか言つてゐた。この男やSは、百姓のことに
なると憤懣と嫌惡に堪へぬといつた話しぶりをする。

六月一日。ヴァガニコフ墓地へ行つて、ホドインカ^{*}の遭難者の墓を見た。メリホヴォま
で新時^{ノイウオエウレミヤ}代の巴里特派員I・J・バヴローフスキイと一緒に來た。

*モスクヴァ西北郊にある原。この年五月十八日ニコライ二世の
戴冠式の祝賀に際しこの原頭で千四百人の群衆が擧殺された。

八月四日。タリジ村の學校の開校式。タリジ村、ベルシヨフ村、ドゥベチニヤ村、シヨルコヴォ村の百姓たちが、私にパンを四塊、聖像を一つ、銀製の鹽入れを二つ贈つて呉れた。シヨルコヴォの百姓ポストノフが演説をした。

八月十五日から十八日まで、Nがお客に来て泊つた。彼は書くものの發表を禁止されてゐるのだ。彼は今やG(息子の方)のことをしきりに罵倒する。Gは新任の出版局長に向つて、N一人のために週刊紙『ネヂェーリヤ』を犠牲にするつもりはないし、「私どもは常に檢閲當局の希望を事前に察して實行して來た」と言つたのである。Nは、からからな天氣でもオーヴァシューズを穿いて、日射病で倒れぬ用心に洋傘をさして歩く。そして冷水で手を洗ふのを怖がり、どうも心臓の工合が悪いとこぼしてゐる。私の所から彼はL・N・トルストイの家へ行つた。

八月二十四日にタガンローグを渡つた。ロストフでは中學時代の友人リョフ・ヴォルケ

ンシテインと晩飯をともにした。彼は辯護士になつて、今では自分の邸もあるし、キスロヴォツク(コーカサスの鐵泉地)に別莊を持つてゐる。ナヒチエヴァンへ行つて見たが、何といふ變り方だらう! どの街路にも電燈がついてゐる。キスロヴォツクでは、サフォーフ將軍の葬式でA・I・チュプローフ(有名な經濟學者)に出逢つた。それから公園でA・N・ヴェセロフスキイ(文學者)に出逢つた。二十八日、シテインゲル男爵と連れだつて獵に行つて、ベルマムートで夜營をした。寒くて、ひどい風が吹いた。

九月二日。ノヴォロシースク。船は『アレクサンドル二世』。三日、フェオドシヤに着いて、スヴォーリンの客になる。I・K・アイヴァゾフスキイ(有名な畫家)に逢ふ。「あなたにはこんな爺さんに用はないでせう」と言つてゐた。彼は、私の方から敬意を表しに來るべきだと思つてゐるのだ。十六日、ハリコフで『智慧の悲しみ』を觀に劇場に行つた。十七日、歸宅。すばらしい天氣。

ヴラヂーミル・S・ソロヴィヨフが、自分はいつもズボンのポケットに没食子ちしよくしを入れて置くと言つてゐた。彼の意見によると、これは痔を根治するさうである。

十月十七日。アレクサンドリンスキイ劇場で私の『鷗』が上演された。失敗だつた。

二十九日。セルブーホヴォへ行つて郡會の集りに出席。

十一月十日。A・F・コニ(有名な法學者)から來信。『鷗』が非常に氣に入つた由。

十一月二十六日の晩、私の家に火事があつた。S・I・シャホフスコイが消火の手傳ひをして下さる。消えた後で公爵は、いつか自分の家から眞夜中に火が出たときには、十二ブード(約五十貫)もある水槽を持ち上げて火にぶつかけたと話された。

十二月四日。十月十七日の公演については『テアトラル』九十五號七十五頁を見よ。私が劇場から逃げ出したといふのは本當だが、あれは幕が降りてからのことだ。二幕か三幕のあひだ、私はLの樂屋に坐り込んでゐた。幕間になると彼女の部屋に、国立劇場の役人連が通常制服に勳章をつけてやつて來た。Pはアンナ勳章をつけてゐた。警視廳の若い美男の役人もゐた。もし人間が自分に向かぬ仕事——例へば藝術に吸ひ着けられると、藝術家にはなれぬものだからやむを得ず役人になる。といふわけで、役人の服を着ながら、科學や芝居や繪畫のまはりに寄生してゐる人間は一體どれほどゐることだらう！生活に向かぬ人間、生活に適應ぬ人間も、やはり役人になるよりほかに道がない。樂屋にゐた肥つた女優たちは、役人連を愛想よくあしらつてゐた——慇懃に、媚を見せて。(Lは、Pがまだ若いのもうアンナ勳章を持つてゐるといつて、しきりに感心してゐた。)つまり農奴時代に、年寄りの名譽ある家政婦のところへ殿様がお見えになつたやうな光景だつた。

十二月二十一日。レヴィタン(風景畫家)が大動脈擴張を病んでゐる。胸に粘土を當てて

ある。素晴らしい習作畫と、燃えるやうな生の意欲。

十二月三十一日。風景畫家のP・I・セリョーギンが來た。

一八九七年

一月十日から二月三日まで國勢調査の仕事。私は第十六區の計算人で、このバヴィンキン郷から出てゐるほかの十五人の計算人を指導する役である。スタロスパスキイ教區の坊さんと、郡會議長のG（これが國勢調査區長である）とを除けば、みんな立派に働いた。Gは調査期間ちゆう殆んどセルプーホフで暮らしてゐて、毎晩そのクラブで晩飯を食つてゐるくせに、病氣だといふ電報を私に打つてよこすのだ。彼のみならず、私たちの郡の郡會議員たちも、ちつとも働らかなかつたといふ噂だ。

N・S・レスコフやS・V・マクシーモフのやうな作家は、わが國の評壇では褒められる筈がなし。……

「神あり」と「神なし」との間には、非常に廣大な原野が横はつてゐる。眞の智者は、大きな困難に堪へてそれを踏破するのだ。ロシア人は、この兩極端のうちどつちか一つを知つてゐるが、その中間には興味を持たない。であるからロシア人は普通、まるつきり無知か、乃至は非常に無知なのである。

ユダヤ人が至極簡單に信教を變へるのを、多くの人は彼等の宗教的無關心に歸してゐる。だがこれは正しい觀察とは言へない。人は宜しく自分の宗教的無關心をも尊重すべきで、斷じてその節を屈すべきではない。けだし立派な人間に於ける宗教的無關心さは、やはり一つの宗教であるから。

二月十三日。V・A・モローゾヴァ夫人の午餐に呼ばれる。お客はチュブローフ、ソボ
レフスキイ、ブラランベルグ、サーブリン、それに私。

二月十五日。ソルダチェンコフ(モスクワの出版業者)のお茶の會。出席者は私とゴリツ
エフ(評論家)とだけ。いい繪が澤山あるが、殆んどどれも掛け方がまづい。お茶が済んで
から皆でレヴィタンの家へ行き、ソルダチェンコフは繪を一枚と習作二枚を千百ルーブル
で買った。ポレーノフ(畫家)に紹介される。夜オストロウーモフ教授を訪ねる。レヴィタ
ンは「とても助かるまい」と教授は言はれる。御自身も病氣で、怯えてをられる様子。

二月十六日。夜、^{ルスカヤ・マイスリ}露西亞思潮社に集まつて、國民劇のことで相談をする。シェフテリの
案が一同の氣に入つた。

二月十九日。『コンチネンタル』で、大改革(農奴解放)の記念午餐會。退屈ではかばか
しい。午餐をする、シャンパンを飲む、がやがや騒ぐ。人民の自覺、人民の良心、自由等
々について演説をする。その一方では食卓のまはりを、燕尾服を着た奴隸が、相も變らぬ
農奴が、そそくさと歩いてゐる。街路には、二月の寒空に馭者が待たしてある。……これ
ちやまるで精靈を欺くといふものだ。

二月二十二日。ノヴォセーリスカヤ學校のための義捐素人芝居を観にセルプーホフへ行
く。ツァリーツインまで私を見送つて呉れたのは……流謫の小王妃といった感じの女だつ
た。——自惚れのおよい女優で、無教育で、いささか俗悪である。

三月二十五日から四月十日までは、オストロウーモフの療養所に寝てゐた。咯血。兩方
の肺尖にラッセルと發氣がある。右の肺尖には鈍麻。

三月二十八日。L・N・トルストイが訪ねて来た。不死について語る。私がノシーロフの短篇『ヴォグール族の芝居』の内容を話したら、彼は非常に満足らしい様子で聴いてゐた。

五月一日。Nが訪ねて来た。相變らずお茶と午餐の禮を言ひ、言ひ譯をいひ、汽車の時間を心配し、饒舌を振ひ、ゴゴリのメジュエフみたいになちよくちよく妻君の話をし、自分の戯曲の校正刷を讀めと言つて一枚また一枚と差し出し、大聲で笑ひ、トルストイが「鵜呑み」にしてしまつたメンシコフを罵倒し、もしスタシユレーヴィチ（當時のリベラリストの頭領）が共和國大統領として觀兵式に臨場したら射殺してやるぞと言ひ、また大聲で笑ひ、口髭をスूपだらけにし、ひどく小食で——だが結局、善良愛すべき男である。

五月四日。修道院の坊さんたちがお客に來た。ダーシャ・ムーシナルプーシキナが訪ねて來た。獵の過失で殺された技師グレーボフの未亡人である。彼女はみんなみん蟬だ。色んな歌を聴かされた。

五月二十四日。チルコヴォへ行つて二つの學校の試験をした。——チルコヴォ學校とミハイロヴォ學校と。

七月十三日。私の寄附で建てたノヴォシヨールキ學校の開校式。百姓たちから題銘入りの聖像を贈られた。郡會からは誰も來なかつた。

畫家のブラーズが私の肖像を描いてゐる（トレチャコフ美術館のため）。日に二回づつ坐る。

七月二十二日。國勢調査の有功章を貰ふ。

七月二十三日。ペテルブルグに來た。スヴォーリンの家の客間に滞留する。V・T……

に逢ふ。彼はヒステリになつたとこぼし、自分の作品を自讃した。P・グネーヂチとE・カルポフに逢ふ。カルポフはレイキンの演じたイスパニヤ貴族の眞似をして見せた。

七月二十七日。イヴァーノフ通りのレイキンの家に行く。二十八日はモスクヴァ。露西^{ルスカ}亞思潮社^{ヤムイヌリ}のソファに南京蟲がゐた。

九月四日。巴里に着いた。ムーラン・ルージュ、腹^{ゲジエ}の踊^{ユウヤントル}り。棺柩^{コフン}のついでに Cafe du Neuf^{デュヌーフ}それから Cafe du Ciel^{デュシエル}等。

九月八日。ピアリツ滞在。ここにはV・M・ソボレフスキイとV・A・モローゾヴァが來てゐる。ピアリツにゐるロシア人は誰でも、ここにはロシア人が多過ぎると、こぼしてゐる。

九月十四日。パヨシヌ。^{ゲランド・クイルス・ランドワーズ}ラント大競馬、闘牛。

九月二十二日。ピアリツからトゥルーズを経てニースへ。

九月二十三日。ニース。パンション・リュスに投宿。マクシム・コヴァレフスキイ（有名な文化史家）と知合ふ。ポーリュエーの彼の家で朝食^{ランヂ}を御馳走になる。N・I・ユラーソフと畫家のヤコビが同席する。モンテ・カルロへ行く。

十月七日。間諜の自白。

十月九日。Bの母親がルーレットをやつてゐるのを見た。不愉快な光景だ。

十一月十五日。モンテ・カルロ。賭金^{クムピエ}扱人が金貨をちよるまかすのを見た。

一八九八年

四月十六日。巴里。M・M・アントコロリスキイ（彫刻家）と知合ふ。そしてピョートル大帝の記念碑のことで交渉する。

五月五日。歸宅。

五月二十六日。ソボレフスキイがメリホヴォに來た。序でに書きとめる。——巴里では雨がちで寒かつたにも拘はらず、退屈せずに二三週間を過ごした。行くときはマクシム・コヴァレフスキイと一緒にだつた。色々興味ある人間と知合ひになつた。ポール・ボワイエ、アール・ロエ、ボンニー、マチュエー・ドレフユス、デ・ロベルティ、ヴァリエーフスキイ、オネーギン。またI・I・シチュエーキン家の朝食や午餐。北方急行で巴里を發ち、ペテ

ルブルグへ行き、それからモスクヴァへ廻つた。家に歸ると素晴らしい天気だつた。

神學校的粗笨さの好標本。ある日の午餐の席上で、マクシム・コヴァレフスキイの席へ批評家のプロトポポフがやつて來て、杯を打ち合はせながらかう言つた、「科學のために乾杯します、但し民衆に害毒を流さぬうちだけですぞ。」

一九〇一年

九月十二日。リョフ・トルストイを訪問した。

十二月七日。L・N・トルストイと電話で話をした。

一九〇三年

一月八日。歴史時論の一九〇二年十一月號、I・N・ザハリイソンの『七〇年代に於けるモスクヴァの演劇生活』といふ論文。この論文には、私が戯曲『三人姉妹』を演劇文學委員會に提出したと書いてあるが、それは違つてゐる。

チエーホフの手帖

昭和十四年三月一日 初版印刷
昭和十四年三月五日 初版發行
昭和二十一年十一月二十日 五版發行



定價十八圓

著者 神西清

發行者 東京都日本橋區小舟町二ノ四 矢部良策

印刷者 東京都豊島區飯田町一ノ二三 中内佐光

發行所

株式會社

創

元

社

東京都日本橋區小舟町二ノ四

電話茅場町(66)二〇六四番
四〇八三番
會員番號A二九〇五一

東京製本工場・印刷所

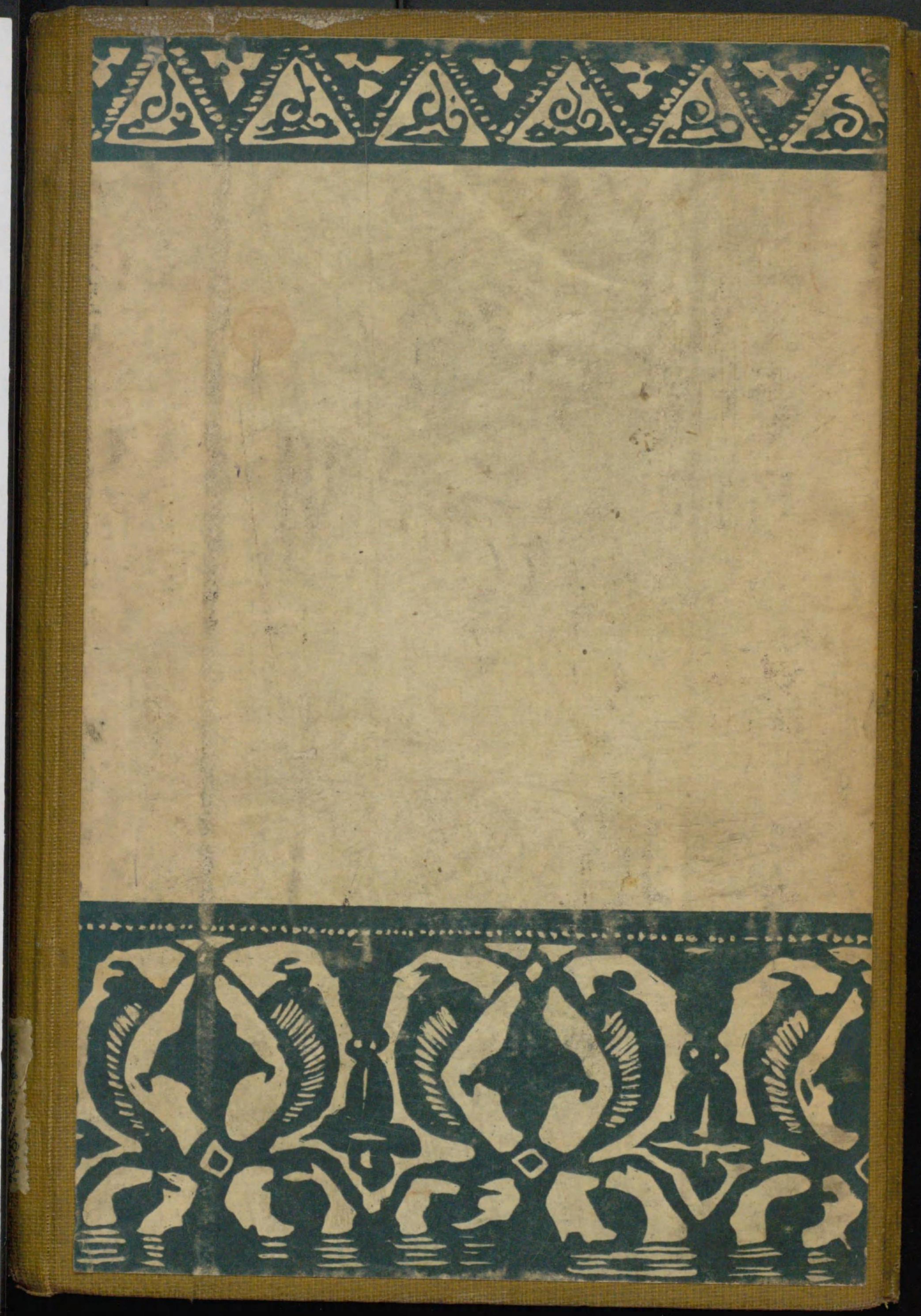
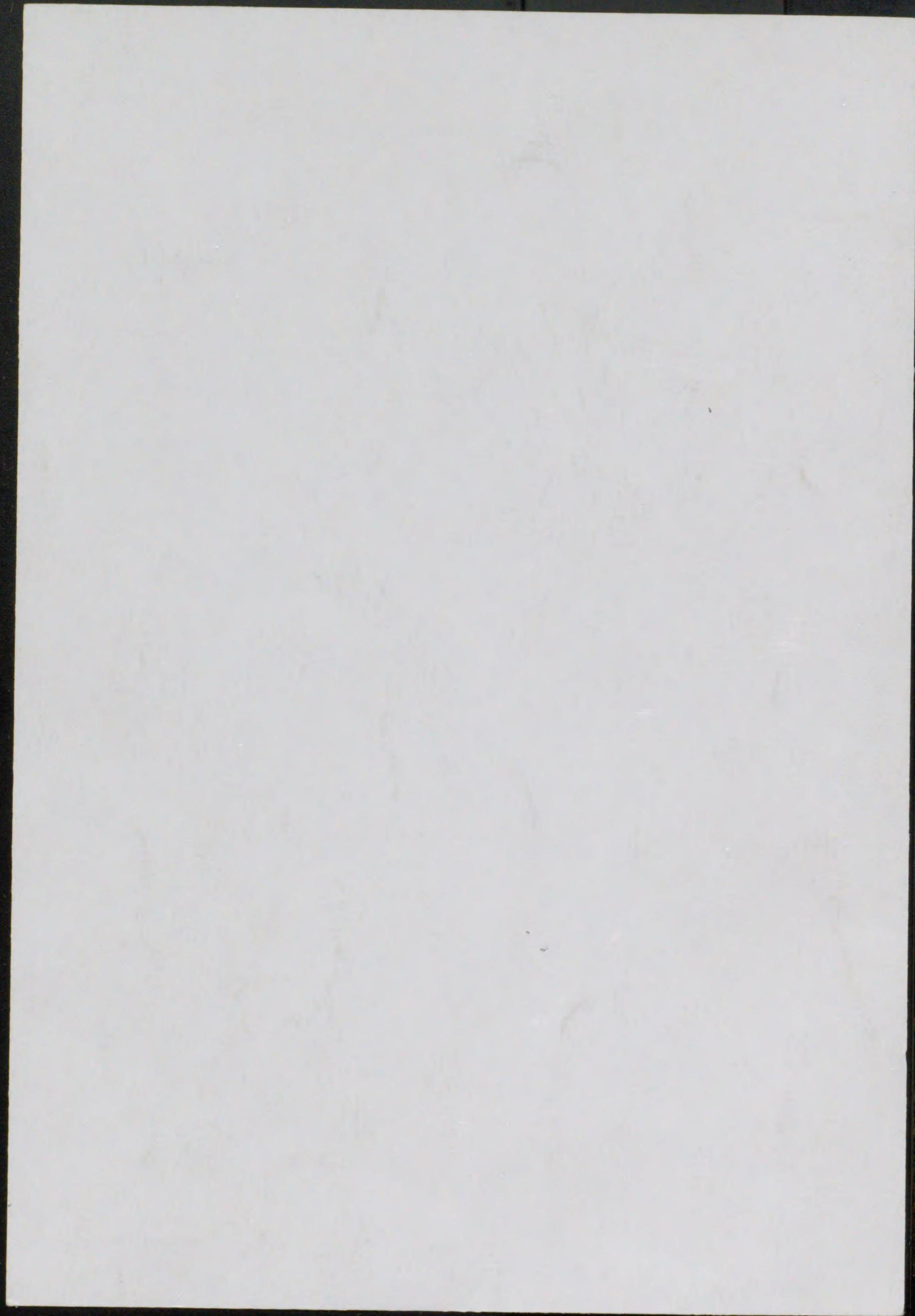
763
374

年 月 日

1316

Vertical text on the right side of the grid: 一 德 天 日

Large diagonal stamp in the center: 國 立 科 學 院 印

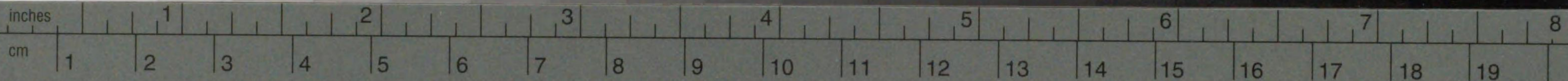


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

